

少子全入化時代における高大接続 — 教育デザインの可能性 —

教育学研究科社会系教育・大学教育総合センター入学者選抜部部門長
下 城 一

序

筆者は、横浜国立大学大学教育総合センター入学者選抜部兼任教員として、横浜国立大学全体の入試について検討し、文部科学省・大学入試センター等の学会、シンポジウムに出席するほか、各種情報の収集を行い、問題点の改善や、今後の国立大学としての横浜国立大学の入試戦略・広報戦略について考察・企画・立案を行ってきた¹⁾。

入試を中心とする広報活動では、近隣高校や予備校での模擬講義や各種説明会の開催(22年度、29高校、19予備校、東大主催主要大学説明会全国5会場で実施)、大学での各種催しの開催(高校生の大学訪問受け入れ18校、高校生インターンシップ受け入れ、オープンキャンパス入試説明会、ホーム・カミングデー入試説明会、総合学習成果発表会)等を企画・実施し、法人化後の国立大学としての地域貢献も兼ね、横浜国立大学の高大連携事業を進めてきた。その立場にあって、現在の高校生・高校現場のありようと、大学およびその接続制度双方の —— これから明らかにする —— 問題の上で仕事をしてきたといえる。

本稿は、そうした立場からの実見を踏まえ、先ず少子全入化により急激な空洞化を余儀なくされている大学入試の現状を概観し、その根本に、全入化が、これまで高倍率による入試圧を学習意欲向上のインセンティブとしてきた日本の高校現場に対し、致命的な学習意欲の低下を引き起こしている事実があることを明らかにする(第一節)。それを踏まえ、入試に代わる大きな可能性をもつ各種の高大接続の事例を確認し、その理念と今後の可能性について検証する(第二節)。併せて、それと連続する側面を持つと考えられる²⁾、本学大学院教育学研究科、教育デザインの可能性について検討する(第三節)。

第一節 少子全入化時代の大学 —— 入試空洞化と学習意欲の低下

象牙の塔と大学が呼ばれ得た時代は、もはや過ぎ去ったと言うしかない。その理由は、近々ここ数十年の、大学を取り巻く状況の、余りに急激な変化にある。以下列挙する数字が、今現在の大学の実情を示している。

まだ記憶に新しい平成4年、205万人を数えピークを迎えた18歳人口は、平成20年には120万人台まで減少し、来年平成24年には110万台になると推定されている³⁾。この間しかし、大学入学者は平成4年の約54万人から増加を続け、平成12年以降約60万人を超えている(平成22年度、605,329人、うち国立100,117人)。その理由は、大学の募集定員が、ピークの平成11年に向けて増え続けたからであり(平成11年、701,087人、うち国立103,000人)、そのため大学進学率は、平成4年の38.8%(大学26.4%短大12.4%)から平成22年、57.2%(大学50.9%短大5.9%)に上昇している。

大学進学率57.2%という数字について、北欧諸国やオーストラリアなど進学率が70%を超えている国 —— アメリカ64.8%、韓国98.5% —— と較べてまだ高くない、とする見方があるが、専修学校高等専門課程などを含めると、実際には、高等教育機関への進学率は79.7%に達し、またこれに、欧米の多くの国では、大学在学者のかなりの部分を25歳以上の者(社会人入学者等)が占めること —— 25歳以上の在学者が、OECD平均で20.7%、日本は僅か2% —— また、欧米諸国での大学卒業者が3割にとどまるといわれているのに対し、日本の大学では9割以上が卒業すること、をも加味すると、日本の18歳～22歳人口の、既に相当な部分が高等教育にすすみ、かつ卒業している —— させられている!? —— 実態が見えてくる。

ユニヴァーサル化段階に入ったと評される以上の日本の高等教育機関の実情について、しかしその下支えとして先にユニヴァーサル化した後期中等教育（22年度高校進学率 98.0%）の内情を考え併せると、そこに想像以上に大きな歪みがあることが浮き彫りになる。

国立大学の入試は、昭和 54 年創設の共通一次試験で国立大学が一律に 5 教科 7 科目を課したが、平成 2 年導入の大学入試センター試験で、大学・受験生に選択を許すア・ラ・カルト方式に変わり、5 教科 5 科目に縮小。その後、平成 16 年以降、高校での基礎科目は普遍的に履修されるべきとの原則に立って —— 国立大学入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)「国立大学は共通に、その理念と目的の達成のために、単に競争的入学試験に合格できる資質と能力を持つのみならず、高等学校等において基礎的教科・科目を普遍的に履修するなど、大学における総合的な教養教育や基礎教育を受け、更に進んで先端的学術分野の成果を履修しうる学生を求める」（国大協）を踏まえ、⁴⁾ —— 現行の 5 教科 7 科目に復している。

この間、国立大学の入学定員が 10 万人前後を推移し、志願倍率が平均して 3～4 倍であったことから、40 万人以上の高校生、すなわち高校生の約半数が国立受験を目指して基礎科目を満遍なく勉強してきたとする解釈がある⁵⁾。実際この数字は、センター受験者 50 万人のうち 7 科目以上の受験者が 50%を超える事実とも符合する。が、確かに、国立大学受験がこのように、後期中等教育全体の学習意欲の牽引として機能してきたからこそ、私立大学が早くから少数科目で入試を実施してきても、高校全体の学力の低下を招かなかつたとみることには一理ある。しかし、一方それで問題が総て覆い尽くせていたわけではない。

高校の科目履修制については、先述のように、国大協が、高校における基礎科目の普遍的履修を求めてきた中で、高校現場では、明らかにそれとは逆のベクトルがはたらいてきたことが知られている。高等学校の指導要領では、高校への進学率が増加の一途をたどり、高校教育の多様化が必須となるなかで、昭和 50 年代以降、「ゆとりカリキュラム」や「新学力観」「ゆとり教育」などの理念に基づいて改訂が進み、必修科目単位数の縮減が進められてきた。昭和 35 年の学習指導要領では、必修単位は 68 単位、全卒業単位数の 80%であったのに対し、平成元年には、「情報」や「総合的な学習の時間」

が新たに加わったにもかかわらず 31 単位 42% 弱にまでその数を減らしている。

一足先にユニヴァーサル化し、様々な入学者を受け入れる必要から高校教育の多様化、個性の尊重、詰め込み教育の是正は、避けようがなかったといえるが、とはいえ、選択履修の増加＝必修科目減の一途を辿った結果、「狭い学習に閉じこもり、細分化された受験シフトに埋没する学習意欲を欠いた」⁶⁾ 高校生が、多くの基礎科目をスキップしたまま私立大学のみならず国立大学へも入学する結果になったのは否めない事実である —— 理系大学への進学に必要な筈の物理Ⅱの高校での教科書購入率が 12%にとどまり、同様、生物Ⅱ、数学Ⅲ、数学 C も 20% を下回る状況は、物理を履修しないで工学部に入学する学生、生物を履修せずに医学系学部に入学者の存在を裏付けている⁷⁾。

高校での基礎的教科の履修がまだ網羅的になされていた昭和 30 年代には、私立大学でさえ、4 科目以上受験が 43%、3 科目以上受験が 88.2%（昭和 31 年）だったのに対し、現在では 1～2 科目受験が 48.8% を占めるまでになり、これに定員割れを防ごうとする私立大学・短大が 5 割を超える学生を AO・推薦入試で入学させ（AO、9.6%、推薦 41.2%）、さらにその 5 割（52.4%）が、もはや学科試験を課さない非学力選抜で入学させているとされる。

学力低下問題の筆頭に上げられる私大短大の非学力選抜もさることながら、しかし、先に挙げた、センター試験への選択制導入も拍車をかけたといわざるをえない高校教育の多様化・必修科目減が、基礎科目の普遍的履修という国大協の目標とは裏腹に、高校での基礎科目の履修減、すなわち学習意欲の減退を招き続けてきた事実を見過ごすことはできない。そうした中、5 教科 7 科目を課し続けている国立大学だけが安泰というわけでは決してない。のみならず、大学入試センター試験それ自体にも目に見えない問題が伏在しているのである。

センター試験が公平性を期さねばならないその本質から、教科書での取り扱いに差異がある代表的素材（例えば古典における枕草子や源氏物語）を出題できない矛盾は夙に指摘されてきたが、むしろ致命的なのは、素点に基づく公平性を目標としてきた共通一次試験・センター試験が典型的な集団準拠型試験であり、最も多い平均的な受験者の成績を基準に、上位、下位を明確

に区分しうることを理想とする本質にたつて —— 成績分布を表すグラフは正規分布になることが理想 —— 作問段階からその理想を追求する余り、受験者全体の能力が変化し、中央値が移動しているにもかかわらず、その変化が把握されないという問題である。気がつくと、センター試験全体が平易化してしまっており、トップ校・医学部受験者の山がもう一つ形成されているという指摘 —— それによりセンター試験を、平易版、難関版の二つに分けるべきとの唐突な提案 —— が新聞紙上を賑わしたのは記憶に新しい。センター試験の平易化は、高校での学習意欲の減退の指標に他ならず、と同時にそれは、センター試験が高校の学習意欲低下の歯止めになっていない事実を如実に傍証している。

であればそれは、国立でも導入が奨励されてきたAO・推薦入試が、基礎科目未履修者の国立大学への入学を許してきたとされる問題でも、むしろ根本は、センター入試が高校での学習意欲向上の目標となりえなくなった点にあったわけで、的確な意欲向上策を欠いたまま、専門に埋没した志願者を相手に、機能分化を奨励された国立大学が⁸⁾ APを掲げ欧米並みのAO入試を行おうとしても、どだい無理だった現実を示している。

他にも、数字には表れてこない問題として、日本の大学入試が、昭和24年の学制改革以来、各大学が作成する個別学力試験に委ねられてきたことは、世界的に見て稀なケースで、欧米では、フランスのグラン・ゼコールやイギリスのオックスフォード、ケンブリッジ、ロンドン大学などごく一部の大学しか例がないこの制度が、進学率がまだ低く、入試圧の高さが学習意欲を形成していた時代には機能し得たものの、それを欠く現在、高度な学力試験を大学毎に課したとしても、センター試験同様それも平易化せざるをえないことは免れようがない現実である。

こうした複数の要因が折り重なって、この10数年、変化は水面下で急激に進行し —— この10年の急激な変化を最も象徴する私大の定員割れは、平成9年の5大学5.4%から、平成20年度266大学47.1%に急増 —— 表面上は安定しているように見える国立大学・センター試験の裏側でも、科目選択制により基礎科目の履修率は徐々に下がり続け、国立大学にも基礎科目をスキップした学生がAO入試や推薦入試で合格しているとすれば、それが高校における普遍的履修に向けた学習意欲の涵養にどれほどマイナスに働いているかは、

もはや多言を要さないであろう。

目に見える以上の高校現場での学習意欲の減退・基礎科目スキップの現状 —— 受け入れる大学の学力低下の現状 —— にあって、文部科学省の要請で、センター試験に代わる新たな高大接続制度の模索が始められたことは、むしろ遅きに失したというほかない。

いわゆる「高大接続テスト」(仮称)の検討については、既に伝えられているところだが、本来克服すべき課題は、それゆえ、上で示したような、広範多岐なものにならざるをえない。即ち、従来のセンター試験固有の問題点の解消だけでなく、その背後にある少子全入化時代・入試圧低下時代の高校における学習意欲低下の問題、選択科目制の問題、また大学側の定員未充足の問題、個別学力試験の適正化問題、リメディアル教育などを踏まえた本来の大学教育の再構築の問題等、が改善されねばならない喫緊の課題である。

昨年平成22年11月に最終報告「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組み」⁹⁾で提起された高大接続テスト(仮称)の概要は、以下のようなものである。

新たに創設されるべき共通テストは、センター試験のような受験者の全体における位置づけを主眼とす集団準拠型テストではなく、高校生一人ひとりがそのカリキュラムに応じた学習の達成度を測り、それを更に相互に比較可能とするタイプ・目標準拠型の共通テストとして設計されねばならない —— それにより高校生が学習した素材(代表的古典等)を直接用いての出題も可能化する。高校生は、在学時に同一年度内も含め複数回の受験を可能とし、自身の向上を測定できるようにする。従って、作問は、アメリカのSAT、ACT、TOEFLや日本の医療系大学間共用試験のように、短答を組み合わせた項目反応型テストとし、解答方式はマークシートによる多肢選択方式、問題と正解は公表されないが問題プールの作成により各試験の難易度を一定に調整できるものとする。

出題に関しては、現行の教科の括りに縛られることなく、複数の教科にまたがって作問されてよく(「科学(理科)」「社会(地歴・公民)」「小論文」といった括りも可)、またスコアは1点刻みの素点方式である必要はない。試験はいずれはコンピューター上での実施を目指し、項目反応型テストの特徴として実施回数が増すに従ってテス

トの信頼性が増す進化特性をもつ。

こうした共通テスト・高校達成度テストを踏まえ国立大学は、これまで基礎学力の担保に問題があって足踏みしてきた AO 入試を本格的に拡大し、機能分化した各大学が個々にそれぞれの理念・APを掲げて学生募集を行い、志願者に対し達成度試験の結果の上に各学部で十分マッチする適性、意欲を持つかを、今まで以上に入念に面接等で吟味する欧米型の本来の AO 入試で入学者を選抜する、と想定されている。

全入化により現行のセンター試験・個別学力試験を含めた大学入試全体の空洞化が抜き差しならない段階に達していることに鑑みれば、たしかに最終報告書が指摘するとおり、限界が明らかなセンター試験から高大接続テストへの切り替えは待ったなしという他ない。が、しかし、その改革を踏まえてなお、これまで縷々確認してきたとおり、問題の核心が、高校生の学習意欲そのものの低下を根本とすると考えられる以上、果たして、試験制度の刷新だけでことが済むのかどうか、改革そのものにネガティブという理由からではなく、問題の核心の洞察からそれを危ぶむ声が少ないのは道理である¹⁰⁾。端的に言えば、達成度テストの提案が学力観の見直しにまで至っていないことは措くとしても、ここまですを履修するようにと強制されて身についた学力と、自から主体的に獲得した学力とを、それが区別することができない点になおそれは致命的な問題を抱えたままであるといわねばならない。

問題が高校生一人ひとりの主体的な学習意欲の涵養にあることがはっきりしているとき、大学が、これまで通り、高大接続を入試の一点に絞り、基礎学力の養成は総て高校に任せきりにすることはもはや許されないといえよう。基礎科目の普遍的履修を高校に任せるにしても、何ゆえそうした基礎学力が、大学での教育研究に必要なのかを説明する責任は大学側にある。基礎学力がどのように大学での高等教育に不可欠で、また高等教育により活きるのか、大学は、それをアドミッション・ポリシーや試験を通じてだけでなく、広く初等中等教育界全体に向かって公知する責任があり、それは最早、学生募集のための大学の PR としてではなく、高等教育へと人材を誘うための入学前教育として行われねばならないはずである。

第二節 高大接続の理念と事例 —— 出発点としての主体性の涵養

横浜国立大学大学教育総合センター入学者選抜部は、国立大学の法人化直後から、より理想的な AO 入試の模索と平行して、志願者の発掘だけでなく地域の教育力への分け隔てのない寄与をめざした高大接続の試みを推進してきた。繰り返しになるが、それは私大型の単なる入試広報とは一線を画し、国立大学としての威儀の顕揚を兼ね併せた入学前教育としての取り組みである。ここでは、高校の総合学習を支援する「総合的な学習の時間」成果発表会とキャリア教育の一環である高校生インターンシップの受け入れとを紹介する。

「総合的な学習の時間」成果発表会は、本学が毎年催す高大連絡協議会と各教育委員会を通じて近隣の高校に呼びかけ、高校で選ばれエントリーした高校生に、先ず発表の事前資料（パワーポイント資料または発表概要）を送付させることから始める（今年度は 2 学期 10 月）。到着した資料をもとに、入学者選抜部で、先ずはテーマ毎に学内から専門的に指導可能な教員を特定し、事前資料を検討してもらい、発表会開催までに更に進めるべき研究のポイントや注意すべき点、発表時に気をつけるべき点等に関する事前指導コメントを作成し、高校の指導教員経由で本人に送付する。それをもとに生徒は、発表会まで時間の許す限り研究の前進・プレゼンテーション資料の改良に努め当日に臨む。

当日（今年度は 12 月 17 日）は、大学を会場に、内容の近い発表者が競い合う形式でプレゼンテーションを進め、事前指導に当たった大学教員が、会場でプレゼンテーションの完成度・事前指導の反映度を見ながら直接コメント・指導し、高校生も交えた会場の投票で授賞を決める（学長表彰）。参加者は更に教員からの当日コメントをもとに、3 学期に研究を最終的に完成することを基本とする（22 年度 7 校 11 組が参加）。

この成果発表会とは別に入学者選抜部では、高校 1 年生を対象とした総合学習のテーマ立ち上げ時の指導を行っており（横須賀高校）、また 3 学期の校内対抗総合学習成果発表会にコメンテーターとして参加し審査・講評を行ったり大学生による模範プレゼンテーションを行っていて（光陵高校 KU 発表会）、それらを含めると、高校における総合学習の、テーマの選定から研究指導、成果物の作成指導、プレゼンテーション指導、高校生

相互の発表会指導まで1学年を通じ、あるいは複数学年に渡って指導を行っていて、将来的には大学で開催している成果発表会にもそうした連続性を持たせることを企図している。

それが今後の高大接続に向けて如何に可能性に富むものであるかを示すために、発表のいくつか紹介しておく。今年度最優秀賞、SPP 指定校西湘高校3年生の「コンクリート強度と加水率の関係を探る」は、外部の研究所にも頼んで自分で作ったモルタル試料の破壊実験を行った本格的な研究であり、その実証実験の手堅さ、プレゼンテーションの冷静さもさることながら、会場での工学部教員の直接の質問にも文献を挙げながら応答するなど、自身の興味関心から取り組んでいることを十二分に実感させるものであった。進路はそのまま工学部建築志望とのことであった。

ユニークさでは、海洋高校3年生による「タンパク質分解酵素による透明標本作製」が、魚体を薬品により透明にし、骨格を青や赤に染めあげた工芸品さながらの標本群を会場に回覧し、手に取った他校の高校生達の五感をフルに刺激して沸かせた。事前のプレゼン資料の書き直しから始まった教育人間科学部理科教員のきめ細かな指導は、最後はそれが生き物であったことに今一度立ち戻らせ、命の尊さ、自然を守ることの大切さから考え直させる意義深いものであった。

プレゼンテーションでは理科系が有利にも思えるなか、光陵高校2年生の「自分がやりたい学問 ～医療への道～」は、テーマに自分自身の進路を選んだキャリア教育系で、希望の医療・看護師の道について丹念に調べ上げ、進路への関心の高い会場の高校生を釘付けにした。当初、現代風に看護職の平均給与をネットで調べ女性職の中では高位であることを理由に志望に積極的だったが、県立医療保険大学講師の教育人間科学部教員から看護師に直接インタビューするよう事前指導を受け、実際に書面でアンケートを行い、給与以上に重労働の職場である実態を知って志望そのものの再検討を結論したのは本人の等身大の実感が伺えた。

また、昨年度の優秀賞、青陵総合高校3年生の「アイスクリームショップ～レインボーハットに必要なもの」も、自身のバイト経験と経営学部志望の進路とを重ねたキャリア教育的視点からのテーマ設定であり、最層の弱小アイスクリーム・ショップをどのように発展させるか考え、教育人間科学部・消費者教育専門の教員的事

前指導により、ペルソナ・メソッドという実際の女子大生の人格を設定しマーケティングする方法を工夫し、高校の指導教員も二人三脚で取り組んだ研究の専門性が高評価に繋がったが、何よりそのプレゼンテーションの好感度が抜群だった。

以上から見て取れるとおり、参加者の取り組みは、先ずもって自身の興味関心から出発した主体的なものであり、既存の学力に閉じこもることなくネットによる情報収集や、プレゼンテーションを通じた表現力の駆使などの所謂 PISA 型リテラシーに自ずと発展し、十二分に教科横断的で、また高校教員の一貫した指導ならびに本学教員の専門的視点からの指導により、学力的にも十分な基礎の上に進められているということが出来る。そして、発表がインセンティブになって自身のやりたかったこと、自分自身の関心の所在が見えてきて —— 所謂「自分探し」の達成・キャリア教育的前進 —— それにより学習全体が主体的になり、基礎科目の勉強・受験勉強にも積極性が出てくることを期待しうるものである。

国立大学による類似の試みは、近いところでは千葉大学の高校生理工学研究発表会があるが、こちらはポスター発表形式で多数の参加者が同時に競い合う方式を取っており(21年度、発表115件)、参加者1名当たり大学教員4名がポスターを前に指導する形で開催されている¹⁰⁾。千葉大形式と比較すれば本学の成果発表会が、参加者数は少ないものの、テーマの立ち上げから途中指導、発表に向けての事前指導、発表当日指導、事後指導と、長期にわたり入念に指導していく特徴がはっきりする。

付言すれば、指導に当たった高校教員の意欲をも大いに喚起するFD的要素も期待でき(後述する、院生の教育インターンシップ時には重要な観点)地域の教育力にも大いに貢献し得る取り組みである。

本年23年度は、連携関係にある教育人間科学部付属横浜中学校と光陵高校相互の総合学習発表会を企画しており、これに、キャリア教育を軸に付属横浜小学校、入選部・本学教員の参加、本学学部生による模範プレゼンテーションも交え、小中高大をキャリア教育で結ぶ総合学習発表会・光陵高校 KU 発表会を企画している。高大接続にとってキャリア教育が各教育段階を一貫する大きな可能性を持つ。将来自分に誇りを持てる職業に就くためには今何をすべきか、児童・生徒一人ひとり

に考える機会を与えるのである。

いまひとつの取り組みは、平成 21 年度より開始した、高校生インターンシップの受け入れである。

これは神奈川県内地区の複数の高校グループからの要望に応じたものだが、総合学習が高校生に現在の学習の発展として進路 = 大学を考えさせる意味を持つのに対し、ダイレクトに将来の職業進路を模索・志向させるキャリア教育の一環である。

当初、本学を事業所として研修させたいとの申し入れだったが、事業所の候補であれば他にいくらもあり、また進学校主体のインターンシップ事業であったことから、本学としては、高校生が将来就きたい職業に関連し、大学ではどのような学習・実習を受けることができるのか実験する試みと翻案した上で受け入れることとした。22 年度 8 高校 25 名を受け入れている。

実施に当たっては、本学部入学者選抜部や大教センター教員から受け入れ可能な研究室を募り、教員志望者に対し教育人間科学部学校教育課程から下城研究室（初年度は吉田〔自然地理〕研究室も参加）、工学部から建築志望者対象に田才研究室、航空・船舶工学志望者対象に上野研究室（初年度は上ノ山〔物性化学〕研究室）が募集を行った。

参加高校生は、初日、学長臨席のもと開校式に臨み、その後、各研究室に分かれ実習に入った。ここでは教員志望者対象の教育人間科学部学校教育課程下城研究室の例を挙げておく。

実施内容の詳細は別表を見ていただきたいが、参加者は、川和、横須賀サイエンス・フロンティア、桜ヶ丘高校 1,2,3 年生 16 名で、毎朝 9 時に集合、ミーティング 2 日目からは前日の振り返り) の後、午前午後一コマずつ、教育人間科学部学校教育課程教員による「教師の視点からの～」と冠した、それぞれの講座の概要説明を交えた特別講義を聴講した。全体の指導は元横浜附属中学校非常勤講師・現連合大学院博士課程の福地真弓と大学教育総合センター専任講師（キャリア教育部・入学者選抜部兼任）居郷至伸、下城が担任形式で行い、参加高校生は全ての授業・教育を、高校生の視点からではなく、教師の視点から観察し考えるよう初日から指導した。また授業以外に、学内見学、学食体験、学部長訪問や大教センターキャリア教育推進部、FD 推進部教員、留学生とのキャリアをめぐるディスカッション、学部 4 年生との対話等を企画した。

毎日、朝のミーティングと、2 コマを受講した後の夕方に、担任による授業の振り返りを行い、ポイントの確認をさせた後、2 日目に本インターンシップ全体を通しての課題を設定し —— 数学の講義内容（「サーティワン・アイスクリームは何故 31 か!？」）をもとに、自分達で実際の授業を工夫し授業案を作ること。最終日に発表 —— 毎日の授業から、教員達の盗むべき授業の工夫を探させ蓄積させた。

最終日は朝からオープン・キャンパスに参加することとし、前日にプログラムから各学部の模擬講義、研究室公開を選ばせ計画を立てさせた。これについては、教員以外の職業も意識してよいこととした。

オープン・キャンパス終了後、教室に集合し、予め決めておいた班に分かれ、各自自分で考えてきた授業案を披露し、その中から代表を決め全員の前でプレゼンテーションした。講評は担任が行い、学部 4 年生 2 名も加わった。

実施して印象に残ったことは多々あるが、最初、他校意識、他学年意識で学校毎に固まっていた高校生達が、時間がたつにつれ混在して席に着くようになり、そのなかでも 3 年生はそれなりに気配りし、2 年生は存分にやんちゃ振りを発揮していたが、各授業から、例えば小学生に、見えないものを見えるように教える工夫の大切さを見出して自身の授業案の目標にしていくなど、最後の発表会では、みんなをあっと思わせる教え方の工夫・補助教材を示しながらプレゼンテーションを行ってみせた。

何よりしかし猛暑の 8 月、部活や補習等の学校行事との連続をおして毎朝 9 時に一人の遅刻欠席もなく集合し、午前午後の授業を熱心に聞くその意欲、熱意は印象的であり、自分達の興味関心と学習が結びつくことこれだけの力を出せる高校生に感心させられ通しであった。大学教員の側も教師を目指す高校生達に十分感化され、より分かりやすくより初歩に立ち返って教えることに新しい刺激を得られているよう見受けられた。

全員が是非この大学に入学したいと言い、もっと続けたいと口々にいいながら帰っていったのが懐かしいが、実際このうちから 3 名が教育人間科学部 AO 入試にトライしている。

類似の試みとしては、高校生参加型の公開講座形式をあげることができようが、それとの比較で高校生インターンシップの利点を挙げれば、5 日間連続して午前午

後、他校の生徒達と机を並べるなか、担任形式で随時到達度を確認しつつフォローアップしていった点が、通常の一方的講義に終わる公開講座形式とは違う特色であろう。多くの高校アンケートが、希望する高大連携として、生徒が大学に向く公開講座に否定的なのは、この点を欠くからと考えられる¹²⁾。

講義内容の点でも、生徒達は、同一テーマの連続講義から得られるものとはまた違ったア・ラ・カルト形式からの様々な刺激を受け取ることができていた。また、普段の自分の高校における授業とは違い、いつもと違った教室空間で、少し背伸びをしながら受ける緊張感のよさを挙げることもできるかもしれない。このことは、筆者が多数経験している高校に向いての出前授業の際よりも、本学訪問者に対する授業の方がずっと真剣に聴講してもらえる事実と符合する。

無論こうした方式のよさを裏返せば固有の課題が見えてくる。連続講義形式であれば、徐々に高めていくことのできる学問的レベルを、このア・ラ・カルト方式のインターンシップ形式では引き上げていくことに工夫がいる。参加者の学年やレベルが様々である面も問題になるが、上に示したように、一貫した課題を設定し、その目的に沿って各講義を聴講するなどの工夫が必須である。とはいえ教員志望のような大きな目標で募集しておいて、教師の視点で、それぞれの教師の固有の工夫を盗んで、というように目標を明確に提示しておけば十分克服可能な課題と考えられる。

また担任制形式での実施は肌理細やかな対応が可能な反面、少人数に限られるという問題も指摘できようが、規模の拡大が必要であれば協定校を組織し幾つものグループを同時進行させるなど工夫は可能である。むしろ小規模制のメリットを存分に活かす道を考えるべきであろう。

今一つは、大学での学習と、高校での基礎科目の学習とをどう有機的に結びつけるかだが、こうした経験が意欲の涵養につながり、学習全体のインセンティブを高めるといふ以外に、先に記したように、高校で学習する基礎科目が、大学での高等教育にどう生きてくるかという点の説明責任は、大学教員の側にあると考える。この点も念頭に置きつつ、さしあたり大学院生主体の教育インターンシップを軸にすることになると思われる教育デザインの可能性について、節を改め考えてみたい。

第三節 教育デザインの可能性 —— キャリア教育を軸にして

大学教育総合センター入学者選抜部による、以上の高大接続の試行的事例を基に、新設の教育学研究科教育実践専攻教育デザインコースの可能性を考えてみたい。先に一言しておく、院生・学部生と高校生を交流させ、教えさせることは、高校生への刺激だけでなく、学部生・院生にも自身の大学生・大学院生としての自覚・責任感を高め、自校教育的側面でも大きな効果を期待できる。短期的なプログラムと長期にわたるプログラムの二つをシミュレートしてみる。

最も短期的なプログラムであれば、先に紹介した、総合学習等のポスター発表形式(千葉大形式)があげられよう。ベーシックには、高校生を大学教員が直接指導するよりも世代・年齢に近い院生・学部生が指導する利点が指摘でき、院生にポスター発表を評価・指導させ、それを教員が指導する方式が考えられる。院生・学部生は自身の考えを的確に高校生に伝えるスキルを必要とするし、教員の立場で評価するための知識や視点を、その場で教員の指導も受けながら実践的に習得することが可能である。

この形式を拡大する方向で、発表会前後に何回か高校を訪問し、事前指導を行う方式であれば —— 入学者選抜部のこれまでの実績をもとにシミュレートすると —— 学年開始時の総合学習のテーマの立ち上げ時から高校に赴いて、テーマ選択の重要性、とくに基礎科目学習とできれば結び付けられる素材探しの重要性について教員が講義し、院生が個別相談形式で指導する方式等が考えられる。ただし、例えば「ポップスの歴史を調べる」というテーマでも¹³⁾、そこから一定の現代史的関心に結びつけるよう指導していくことはできるし、「心理学テスト」といった高校生の人気テーマについては、統計調査の必要性について教えたりネットリテラシーを身につけさせたり、というように基礎学力に結びつける指導は可能で、どのようなテーマに生徒が関心を向けたとしても対応は可能と考えられる。その後、定期的な訪問指導を繰り返すことも可能だが、その間、生徒個々の研究をより専門的なものにステップ・アップさせるために、それが大学のどのような講義・研究と結びつくか、院生が生徒と一緒に考え、実際に大学に来させて受講体験させることも可能である。院生に生徒の研

別表：22年度高校生インターンシップ（横浜北地区、市立、他）下城研究室受け入れプラン 010801

趣旨：教員志望の高校生に、教員養成系学部での授業を体験させる。

目標：「教える」視点で考えることを、早期に身につけさせる。

下城 一 教育人間科学部教授、大学教育総合センター入学者選抜部

居郷至伸 大学教育総合センター専任講師、入学者選抜部・キャリア教育推進部

福地真弓 連合大学院博士課程、元附属横浜中学校講師

ホームルーム：7-105c

授業教室：7-304、302

* 高校生には誓約書、保険の確認、済み。

スケジュール

日時	8月2日	3日	4日	5日	6日
9時～10時20分	集合：入試課 開講式 事務局5階 第一会議室 下城・居郷・福地	集合7-105 下城・福地 前日の復習 今日のポイント確認：各先生の工夫に注目！	集合7-105 下城・福地 前日の要点確認 今日のポイント：各先生の狙いは何か？	図書館1階集合（1限106試験のため） 前日の要点確認 今日のポイント：身の回りを振り返って	集合7-105 教員採用試験面接見学（就職支援委員会 青山） 雰囲気を知る
10時30分～11時30分	キャンパス案内 下城 7-105 高校時に大学の授業を見学するインターンシップの意義について	教育：馬場裕教授 7-304 数学教育について・「教える」視点で考えてみる：「サーティーワン・アイス」はなぜ31か!?	教育：多和田准教授 7-304 社会科教育・「教える」視点で考えてみる：歴史を実感させる工夫	教育：泉真由子准教授 7-304 障害児教育の重要性：身の回りにいる障害者のことを考えてみる・その視点に立って	オープンキャンパス 個別見学
昼食 11時半～13時	昼休 学食案内	昼休 12:45 学部長訪問	昼休	昼休	同上
13時～14時半	キャンパス案内 下城 7-304 教員養成系学部の授業について：授業案作成の視点で考える。課題作り	図書館見学 下城 図書館304 先輩に聞く：「私のキャリア」（キャリア教育）ディスカッション（FD推進部 安野舞子、居郷、（留学生）金月）	教育：平島由美子教授 物理学実験：「小学校教材を工夫する・ダイソー製品を使って・可視化する工夫」教育2-316	教育：西栄二郎准教授 集合7-105 環境保護を原理的に考えなおす：「環境番組の嘘」（生物・ディベート練習）	課題発表会：わたしの授業案 班別に個別発表 班対抗発表会（学部4年鈴木理沙、高橋晴香）
15時～16時	一日のまとめ 下城 先生経験者・福地に聴いてみる	下城・福地・居郷 7-105 馬場先生の授業、居郷、安野先生の話を振り返る	下城・福地 7-105 多和田、平島先生の授業考察 先輩に聴く：下城ゼミ・高橋淳平 棚橋先生に世界史について聞く	下城・福地 7-105 泉、西先生の授業を振り返る 下城研究室を見る 8階からキャンパス・富士山を見る	下城・福地 7-105 学部生・高橋、鈴木と話す 5日間を振り返る 記念撮影

究個々のコーディネーター的役割を果たさせ、教員はそれを指導する方式である。生徒たちの研究成果がまとまったら、高校あるいは大学で成果発表会を企画し、選抜発表会形式か、あるいは全員が発表可能なポスター発表形式にして、院生に細かくコメント・講評させ、生徒はそれを踏まえ最終的に研究を完成させる、学年を通じての指導が可能である(2学年をかけ研究完成させる高校も多い)。

年間形式で総合学習を進めている高校は数多いが、定期的に外部講師等を招いて行っている学校としては横須賀高校(横高アカデミア)やサイエンス・フロンティア高校、西湘高校等SPP、SSH指定校、また教育人間科学部と連携を深めている光陵高校、ならびに連携校の附属横浜中学校、附属小中等がある。

次に高校生インターンシップの例で考えてみる。教育デザイン・院生の立場からすればこの場合、大学を会場とできる利便性が大きい——先述のとおり高校生の側からも、大学に来て学ぶことは十分刺激になっている——だけでなく、ベーシックには、生徒個々のチューターを院生が担当し、生徒と一緒に教員の授業を受けて学部授業のおさらい、また教員の授業形式を見習うことが期待できるが、この方式の最大のメリットは、何より院生自身に授業を行わせることができる点(教育インターンシップ)で、通常の授業期間中の学校では不可能な、カリキュラムに囚われない自分たちで自由にデザインした教育内容・教育方式をも実際に実験的に展開できるという利点がある(文字通りの教育デザイン)。

院生には、事前に十分時間をかけて、各自の専門から授業設計を行わせ、授業案や補助教材の準備だけでなく自らの授業プランを掲げて生徒の募集から行わせることができる。高校生インターンシップ期間の5日間をフルに計画させることも可能だし、その中の数コマを担当させることもできるが、授業方式を個人方式だけでなく実験的にリレー授業方式や、グループ指導方式等様々な観点からデザインさせ、実施させてもよい。教える内容も専門に特化させることもできれば、いくつかの専門をブレンドして総合的にデザインさせることなども試行可能で、学力観の見直しに向けたリテラシー教育等、様々な方式を試みるチャンスと考えられる。ただし、あくまで高校生に理解可能なように、先に教員の例で紹介していたように、教授法や教授内容を十分咀嚼し院生自身の血肉にしておくことは無論不可欠である。

また、教員より生徒たちに近い世代の学部生・院生に高校の基礎教科との関連を考えさせ、自分たちが高校で学んできたことの、何が大学で活かされているかを実際に高校生たちに伝えさせるという課題を課すことも可能だろう。メリットとしては、先ず高校生たちが今の自分たちの基礎科目の学習と大学進学とを、経験者である先輩たちを通してしっかり連続的に認識できることは無論として、教員を目指す院生・学部生が、自身の経験を踏まえつつ連続性を意識しながら基礎教科を教える効果が期待でき、それにより学生自身が大学・大学院で学んでいることを改めて考え、自身の学生・大学院生としての自覚を高められるとともに、それと現場との接続を十二分に考えることができる。また、生徒が初等中等高等教育と発展していく存在であり、単にその時々段階での教科書だけを教えるのではなく、そこから俯瞰的に生徒の関心をどのように引き出し発展させられるよう教えていけばよいかその展望を考えさせる格好の機会となると期待できよう。

無論、教員養成志望という枠を飛び越えて、理科や社会、英語等の直接的関心に立ち、種々の学部の大学教育へと結びつける指導をデザインさせることも可能であり、特定の高校・中学と協定を結び、教育デザイン・センターをハブに教育委員会等も介し、様々なプログラムを同時進行で走らせるプロジェクトの企画も十分可能である。他にもEラーニング教材の開発・実施(千葉工業大学:リメディアル教育の例⁴⁾)や、国内にも複数あるIB(国際バカロレア)認定高校——英文での長文の卒業研究の指導により海外トップ大への入学実績——との連携等が考えられる。

繰り返しになるが、以上のような、通常のカリキュラム進行の中では不可能な試行的教育を、高校生インターンシップと教育デザインの組み合わせの中では実際に実践していくことができ、それを少人数担任制の形で十分経過観察しながら進めることが可能である。また、付言するまでもなく、教員の立場からすれば、高大接続の実質的素材を直かに提供してくれるものとして、これからの大学教育・高大接続を考える上でこれほど有効な観察素材はないことが期待される。

以上、理解されるように、高大接続の実践と教育デザインとの連携は、双方にとって大きな可能性を持つ。また何よりそれは、現在の高校の学習意欲の低下に歯止めをかけ、ひいては大学生の学力回復に直結する高大

接続の根幹的試みとなりうるものである。これまでの連携の実を活かした、今後の魅力的な高大接続プロジェクトのデザイン・提案にそれは懸かっている。既に各種高校、教育委員会からの大学への期待・要望は出揃っており、機は十二分に熟していると考えられる。

おわりに —— ポスト近代の学力像

物質的豊かさを目指してきた近代に限界が見え、国家をはじめとする近代社会の枠組みも変化を余儀なくされている現在、大学が果たすべき教育・研究、そこで扱われる知の形態もまた変化せざるを得ない。

初等中等教育と身につけてきた基礎学力を基に、高等教育で習得した技術知が、卒業後 20 年、30 年と有効でありえた時代なら、4 年をかけての大学教育にも意味があった。然るに 1 年を待たずに急速な技術進歩で知が刷新され続ける現在、たとえ最先端の研究を進めている大学教員でさえ、分野がずれれば、先端的な知識からかけ離れることとなる。既に大学は知の中心ではあり得なくなっているのである。

その影響から遠いように思われている教育系も例外ではない。先人の背中を見ながら不変的な知を学ぶのではなく、ネットなり社会なり目の前で変化し続ける知を捉え、纏め上げ、すぐさままた次のフィールドに移っていくノマド的なマネジメント能力が求められている。自ずと教育の形も変化せざるをえない。

目まぐるしく変貌する社会に巧みに呼应し、それぞれの場面でキャラ化し¹⁵⁾、もはや自分に連続性がないことを不思議にも思わない現代の子どもたちに —— それゆえ場面場面で違う顔を見せ、違うことを言い、違う態度をとってもまるで平気であり、抜け駆けや売り抜け、匿名犯罪など、モラル・ハザードが常態化する —— 激変する社会の中でも一貫して自分という主体を作っていくことの大切さ、確たる誇りを失わない自分を作っていく大切さを教えなければならない。

教育デザインには、そこまでを見通しての教育の再定義を期待したい。たとえ担うべき仕事が見つからなくとも、国家が没落しようとも、世界に関心を抱き続け、人に関心を抱き続け、何より生きることに関心をもち続

けていられる学びの意欲を枯らさないようにしておきたい。教育の原点はそこにあるように思う。

注

- 1) 拙稿「横浜国立大学 YNU 入試広報戦略の理念」(『教育通信』(文部科学省 2010,3 No.239 ,18-19 頁参照。
- 2) 高大接続事業と教育デザインの合流の可能性については、以下の論文を参照。
主体性・PISA 型学力・少人数制：内田伸子「未来の学部教育のデザイン—知識伝達型から臨床知創生・交流型への転換」。
フィンランド教員養成大・学内デイケアセンターの例：高橋勝「教育デザインと教員養成の質の高度化」。
いずれも『教育デザイン研究』創刊号(横浜国立大学教育デザインセンター 2010,3) 12 頁以下。
- 3) データは、文部科学省 HP「平成 22 年度国公立私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」(平成 22 年 10 月)：http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/10/1297952_1532.html 他を参照した。
- 4) 「平成 22 年度以降の国立大学の入学者選抜制度 —— 国立大学協会の基本方針 —— 」平成 19 年 11 月 5 日。
- 5) 同上：10 頁以下参照。
- 6) 「国立大学の入試改革—大学入試の大衆化を超えて—」国大協平成 12 年 11 月。
- 7) 「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組み」報告書 平成 22 年 11 月。http://www.shidaiaren.or.jp/blog/files/doc/setuzokutest_report.pdf
- 8) 平成 17 年中教審答申「わが国の高等教育の将来像」参照。
- 9) 前掲(註 7) 報告書。
- 10) 例えば、天野郁夫「高校と大学の間」(『I D E』 2010 年 10 月号) 1 頁以下参照。
- 11) 前掲：『I D E』、23 頁以下参照。
- 12) 例えば「神戸大学における高大接続の試み—新しい方向性を求めて—」国大協高大接続ワークショップ 平成 20 年 10 月 参照。
- 13) 横須賀高校 2010 年 3 月総合学習経過発表会。
- 14) 前掲『I D E』 27 頁以下参照。
- 15) 土井隆義『キャラ化する / される子どもたち 排除型社会における新たな人間像』(岩波ブックレット 2009) 参照。